

# スコットランドのバラッド詩とナショナル・アイデンティティ

中島, 久代

<https://doi.org/10.15017/1654598>

---

出版情報 : Kyushu University, 2015, 博士 (文学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : Fulltext available.



氏 名 : 中島 久代 (Nakashima Hisayo)

論 文 名 : Scottish Balladry and National Identity

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、以下の 3 項目を目的として執筆された。

- (1) 17 世紀から現在にいたる「バラッド詩の系譜」中の 19 世紀の作品群について、全体の意義や特色に関して、また個別の作品について詳細な研究を行うこと。伝承バラッドに影響を受けて創作されたバラッド詩は、現在のところ 800 作品以上を数え、19 世紀は特にバラッド詩の隆盛を見た。この時代に創作された多くの模倣詩の意味・意義の一面を解明し、バラッド詩研究の進展を図る。
- (2) 19 世紀のスコットランドのバラッド詩をナショナル・アイデンティティの観点から考察すること。1707 年まで独立国であったスコットランドにとって、文化・文学のアイデンティティを確立することは、かねてスコットランド文学の命題であった。スコットランド、ボーダー地方の伝説の人物「うたびとトマス」は、中世ロマンス、伝承バラッド、Walter Scott、John Davidson、Edwin Muir などのスコットランド詩人が扱ったモチーフであり、スコットランド文学のアイデンティティを考察する恰好の題材である。スコットランド詩人は、うたびとトマスというモチーフによってどのようにアイデンティティを表現しているかを、作品の詳細な分析によって考察する。
- (3) John Davidson のバラッド詩の再・再評価を行うこと。Davidson は 1960 年代から再評価が高まったスコットランド詩人であり、スコティッシュ・ルネサンスが目指したモダニズムの先駆者であるが、通常詩人の評価は後期の作品を中心になされ、バラッド詩批評は十分ではない。Davidson のバラッド詩から 19 世紀のスコティッシュ・アイデンティティの両面性とゆらぎを明らかにする。

第 I 章「英国バラッド詩の系譜とスコットのゴシズム」においては、19 世紀のスコットランド・バラッド詩を議論する前提として、第 1 節では 18 世紀初頭から 19 世紀の英国バラッド詩の全体像を俯瞰し、19 世紀全体の特質を提示した上で、Scott 編纂の *Minstrelsy of the Scottish Border* が背負うアイデンティティ擁護の姿勢について論じた。第 2 節では、19 世紀バラッド詩の出発点を形成した Scott について、バラッド詩人としての出発点は Thomas Percy に影響を受けたドイツ詩人 Gottfried August Bürger のゴシック・バラッド詩“Lenore”の翻訳“William and Helen”に始まるが、Scott にとってのゴシズムは郷土精神の表現となっていることを論じた。

第 II 章「Davidson のスコティッシュ・アイデンティティへの反発と回帰」においては、第 1 節で“A Ballad in Blank Verse”および“Ayrshire Jock”を中心として、ペルソナの語りから Davidson の故郷に対する反発と愛着の両面性を読み解き、アイデンティティのゆらぎの背後にある 19 世紀スコットランド文化の退潮とその時代の詩の特色を論じた。第 2 節では、Davidson をバラッド詩創作へ導いた時代と地域の環境をまとめ、Davidson の作品に顕著なアイロニー、パロディ、孤高のヒーローという独自性を作品から論じ、生涯最後のバラッド詩となった“A Runnable Stag”では、スコットの“William and Helen”に顕著な言葉の音の効果と同じような効果音が使われていること

を指摘し、Davidson のバラッド詩人としての生涯が Scott に始まり Scott に終わること、つまり、郷土の先人 Scott への Davidson の反発と回帰をバラッド詩から論じた。

第 III 章「うたびとトマスとスコティッシュ・アイデンティティのゆらぎ」において、第 1 節では、「うたびとトマス」を‘nation’として想像されるスコットランドの表象として位置づけ、伝承バラッドを題材とした Scott のバラッド詩、そのスコットのバラッド詩の模倣であると宣言された Davidson のバラッド詩を比較し、郷土のプライドの擁護としての表象「うたびとトマス」は、Davidson では不安感を煽るゴシシズムの表象に変質していることを指摘した。さらに、Scott も *Minstrelsy* 頭注ですでに気付いていたように、うたびとトマスは中世よりスコットランド擁護とイングランド擁護の多義性もつ存在として描かれており、トマスという表象自体にアイデンティティのゆらぎが存在することを指摘した。第 2 節では、20 世紀の Muir に引き注がれたうたびとトマスは、John Keats が“La Belle Dame sans Merci”に描いた「苦悶するトマス」の末裔であること、ロマン派的変質という過程を経たトマス像の背景には、Muir 自身がかかえる「半ばスコットランド人」という帰属意識のゆらぎとそのための祖国批判の姿勢があることを論じた。

以上を通して本論文は、19 世紀のスコットランドのバラッド詩が、スコティッシュ・アイデンティティの抱える両面性とゆらぎという性質を一様に表現しているという事実を指摘した。同時に、スコットランドのバラッド詩人たちにとってのアイデンティティの表現とは、先人の作品によって一旦は形成されたスコティッシュ・アイデンティティを絶えず変質させるという創造的批判行為と理解されることを明らかにした。